

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	カンウチョル 姜宇哲
<p>主論文題目：</p> <p style="text-align: center;">韓国の国際協力政策 — 発展過程における連続性と変化 —</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>李明博大統領は就任演説において、国連 PKO と ODA に力を入れると述べ、国際協力の強化を示唆した。実際に、2012 年には DAC 加盟国の中で ODA 増加率が 1 位となった。2000 年代後半には、明らかな変化として、外交政策に開発援助が加わった。その中で最も象徴的な出来事が、2009 年に韓国が OECD の DAC に加盟したことである。他方、途上国の経済発展と福祉向上という国際規範から離れた形で、いわば自国の国益追求の手段として自由に開発援助を活用する新興援助国もある。しかし、1960 年代半ばから開発援助を実施してきた韓国は、自ら制度改革を重ね DAC 加盟を果たした。韓国の国際政治研究においては、四強（米、露、中、日）の安全保障が主な分析対象になり、途上国に対する開発援助は主たる分析対象とされず付随的な要素として扱われてきた。また、制度論の同型化論のアプローチ、とりわけ模倣、強制、学習、競争という観点からは、韓国の開発援助の一部しか説明できない。</p> <p>以上の問題意識を出発点として、本論文は、なぜ韓国が被援助国の地位から新興援助国の立場を経て、DAC 加盟国になるに至ったのかを明らかにする。この間に詳細に答えるため、本稿は次の三つの分析視角を元に検証を行った。</p> <p>第一に、韓国の開発援助政策の推進要因には、大統領の政治的リーダーシップがあった。開発援助政策の発展に伴い官僚組織対立の顕在化といった現象もみられたが、その政策展開を大局において規定したのは大統領による議題設定であった。第二に、韓国の歴代政権において、開発援助政策をめぐる議論は引き継がれた。韓国の開発援助政策の「連続性」を一言で表せば、それは各政権の問題意識に応じて異なる文脈の中で開発援助が展開されてきた一方、詰み残された課題を次の政権が引き継ぐ形で連続と発展してきたことである。第三に、大統領の政治的リーダーシップによって設定された国家像を実現する手段として開発援助は有効に機能した。そうした中で韓国の開発援助は、短期的な国益を重視する現実主義から人類の普遍的な価値を追求する構成主義へとその軸足を移しつつある。経済大国から尊敬される国へという歴代政権が掲げた国家像、いわば先進国入りへの願望を実現する手段として、開発援助が積極的に用いられたのだった。</p> <p>本研究は詳細な分析を通じて、韓国の外交政策、開発援助政策、開発援助をめぐる比較研究への新たな視座を提示した。</p> <p>キーワード：韓国、政府開発援助、発展過程、連続性、変化</p>			